

教祖140年祭
三年千日の
活動方針

「教祖のひながたを目標に
全教会心定めの達成」

◇少年会網走団 こどもおぢばがえり◇

7月27日 (土) から8月4日 (日) までおぢばで開催され、

本隊・関東隊・常呂隊・誠陽隊・網葉隊が帰参させて頂き、

おぢばで楽しい夏を過ごさせて頂いた。

参加者 少年会員44名 育成会員36名 計80名



大教会のHP がご覧になれます！

月報には掲載されない写真もいっぱいです！

ぜひ一度ご覧下さい♪



発行所
天理教網走大教会
布教部出版広報掛
〒093-0073
網走市北3条西6丁目
TEL 0152-43-2227
FAX 0152-44-2227

大教会七月月次祭

大教会7月の月次祭は、12日午前9時30分から大教会長祭主のもと、執行された。

大教会長は祭文で、親神様の御守護に御礼申し上げた後、「今月二十七日より八月二日にかけて網走団に繋がる少年会員も、こどもおぢばがえりに参加させて頂きます。一人でも多くの子供達が親里へお引き寄せ頂き、教祖の親心に触れさせて頂きますよう、又、

期間中無事滞りなくお連れ通り頂けますようお願い申し上げます。私共教会長をはじめようぼく一同は、今まさに大事なこの時旬に、親神様より与えて頂きます御用を、素直にはいと受け、教祖のひながたを辿り一生懸命に伏せ込ませて頂く所存でございます。」と奏上した。

に、ようぼく一斉活動日を五回設けて、一人でも多くのようぼくに活動して頂き、教祖にお喜び頂ける成人の姿をお見せ頂ける場を設けて頂いていると思うのであります。

神殿講話

栗林徳正 役員



神殿講話全文

只今の旬は、教祖百四十年祭、三年千日の二年目を迎え、

早や、半分が過ぎております。その中、ご本部においては、年祭活動の一年目より、ようぼく講習会が開催されました。毎月多くのようぼくの方が受

講され、五十名の定員がすぐ一杯になるそうです。

更に、毎月日曜、祝日、二十五日と教祖百四十年祭へのお願いづとめが行われ、その後はおさづけの取り次ぎが行われています。論達に示される、お願いづとめ、おさづけの取り次ぎ、ようぼくの丹精と進められております。

また各教区や、支部に於いては、常時活動である、四月の全教一斉ひのきしんデーや、九月のにをいがけデーの合間

そして、年祭活動と同時に、網走おたすけ委員会を設け、初席者のご守護、中席者の丹精を目標に努めさせて頂いております。

それには先ず、会長夫妻が日々を喜んで過ごしているのか？と考え、「よろこび日記」というものを作成して毎日の生活の中、会長夫妻が喜びを見つけ記入して頂いております。始めは大変で、行事しか記入できませんでしたが、毎日書くことよって少しずつ喜びを見つけているという方も

多いのではないのでしょうか？
また、毎月二十九日には大教会一斉活動日を設けて、同じ時間にお願いとめをつとめ、論達の拝読その後、教会の外に出て活動をさせて頂いております。

また、修養科生のご守護に於いては、「修養科事前研修会網走よろこびセミナー」を開催させて頂き、修養科に入る前の皆様に、大教会への参拝を通して、信仰の上での大本である「親神様、教祖、ごば」という講義を始め、基本教理として「おつとめ」「か

しもの・かりもの、ひのきしん」また、自らの心を見つめ直す講義として、「八つのほこり、いんねん、たんのう」とお道の基本を分かり易い言葉を使って進め、各講義の終わりには、受講者同士の「練り合い」を設けて毎月開催の運びとなっております。

また今年からは、修養科修了後の丹精並びに、教人講習への勧めとして、「修養科事後研修会網走ひながたセミナー」を五月より開始させて頂きました。

していくわけでありませぬ。当然その内の一つのサイクルがでない場合、成長することは難しいと思います。
そして、この成長のサイクルである摂取、消化、吸収、排泄は、ようぼくの心の成人「成長」にも当てはまるのではないのでしょうか。

摂取とは、教理を学んだり、色々なお話を聞いてみることに思っています。そして、取り入れたものを行動に移してみたり、自身の心の向きを親神様に向ける努力をすることが、消化であり吸収だと思っております。そして排泄とは、心の成人に不要なものを捨てる努力ではないかと思えます。

前述した事前研修会、事後研修会は突然思いついた講習会ではありません。三年千日の前である三年前より計画しております。その後、おどばの声を頂き、後押しして頂いているのではないかと感じさせて頂きます。

年祭の句は、私たちようぼくの成人の句であります。当然おどばの声が続いてきます、その声を元に大教会の声、各教会の声が流れてきます。い

は年二回の開催となっております、次回は十一月の開催予定であります。内容はと言いますと、

教祖のひながたを「教祖物語」や「稿本天理教教祖伝逸話篇」を通して、再確認させて頂き、自身の生活にひながたを照らし合わせてみるといった内容であり、大変実りのある講習内容となっております。

話は、修養科事前研修会に戻らせて頂きますが、昨年三月に始まりました研修会ですが、先月までの受講者数はなんと、八十名となり、今月も十名程の予定が入っております。少しづつではあります、修養科生のご守護に繋がってきているのではないかと感じております。

何故こういった人数になったのか？当初のこちらの考えと違う一面が見受けられました。始めは、一度受講されたら、再度、受講はされないと

思っておりましたが、一度受講された皆様も、新しい人を誘って何度も受講しに来られました。

また、練り合いの席上では、同じ講義を聞いてはいるが、新しい疑問や、自分の心の状態によって、受け取り方が違ってくる。というのであります。

また、講義をする先生が代わることにより、こちらの受け取り方も違ってくるというのであります。明らかに、受講される皆様の心の向きが変わり、私たち講義をさせて頂く側の心の向きが変わってきていると思っております。

この心の向きが変わるといふ表現は、お道では、心の入れ替えや、心の成人といった言葉に置き換えることができると思っております。

おふでさきには、月日にハドンなどころにいるものも 心しだいにみなうけとるで (十七ー13)

いま、ではとんな心でいたるとも いちやのまにも心いれかゑ (十七ー14)
しんぢつに心すきやかいれかゑば それも月日がすぐにうけとる (十七ー15)
とあります。これは、かんろだいができるまでに心の掃除をしなさい。心の入れ替えは、真実があるならば、一夜の間にも入れ替えることができま

すよ。と、そういった内容で

その話を、提案して頂いた准役員先生にお話ししたところこのような話を頂きました。「今は、年祭の句であり、大教会として、教祖のひながたを中心し、物事を考えていく時期ではないのか。教祖ならどうするの？」という視点に立った時、教祖ならすぐにも駆けつけるのではないかと、その時の私が手掛けているのは、ひながたセミナーの原稿であります。自分の都合を先に立てているようでは、伝わるものも伝わらなくなってしまうと反省させて頂き、その場で三名の会長と行かせて頂くことを決めました。

今年の年頭ご挨拶で真柱様は、この度の震災について、「お互いの心の成人の鈍さ」と仰せられました。先程、心の成人には、摂取、消化、吸収、排泄と申し上げました。

私は日々摂取のみを繰り返している状態であり、教祖のひながたというものを言葉だけに、形のみを伝えていくことに気が付かせて頂くことができました。この反省を生かし、

摂取、消化、吸収、排泄の繰

あります。
また、「成人」という上には、

よふぼく一人ひとりが教祖の道具衆としての自覚を高め、仕切って成人の歩みを進めることが、教祖年祭を勤める意義である。

本来私たちは、心の入れ替えを親神様より促されているのであります。しかし遅々として進まない子供の成人を心配下され、教祖の年祭を通して、ようぼくとして成人の歩みを進めさせて頂く。このような動き方、働き方が大切な句であると思っております。

私自身、講師としてご命を頂き、講義の原稿を書かせて頂きましたが、実際には分かってはいるようで、分かっていない。ということが、何度もありました。

「八つのほこり、いんねん、たんのう」の原稿を書かせて頂きましたが、その際、ふとしたことで夫婦喧嘩になり、文章が一行も進まなくなるということがありました。「たんのう」が大切ですよと言っている反面、自分自身が出来ていない

り返しを通して、心の成人に務めさせて頂きたいものです。教祖百四十年祭の年祭活動の二年目は、震災を通して、「心の成人の鈍さ」をご指摘頂きましたが、教祖百三十年祭の二年目の年頭ご挨拶を拝察させて頂きますと、「一年目を振り返って、足りなかった点がないか反省し、また、良かったところは更に伸ばして、二年目の動きに繋げることを心に強く持つことが大切だと思っております。

出遅れたと感じている人もあるかもしれませんが、手遅れということはないのであつて、これから動きますということを誓って、勇んで取り組んでいけばいいことだと思っております。(真柱訓話集第七十四巻)」と仰せられています。

現在も反省したり、喜んでみたりと繰り返していることが多い日常ですが、今一度、教祖の年祭活動の句であることを思い直して、まだ、手遅れではないとお互いに確認し合い、励まし合って、務めさせて頂きたいと思えます。

最後に少年会の団長という

という、笑い話にもならないことがありました。
そんなことを繰り返して、繰り返すことによって成人とまでは言いませんが、新たな発見をさせて頂き、遅々として進みはしませんが、心の向きを直して頂いているように感じました。

先程、ようぼくの成人とお伝え致しましたが、成人という言葉には、「幼いものが成長する。また成年に達する。」などがありました。

そこで、「成長」という言葉を引きみますと、「育て大きくなる。子供が大きくなる様。」とあります。私たち人間が子供の身体から大人の身体に成長するということを考えますと、先ずは、物を食べることから始まります。これを「摂取」といいます。

次にその食べたものを分解して身体に取り込むことを「消化、吸収」といいます。そして最後は、いらぬものを外に出します。これが「排泄」であります。

身体の成長には、この摂取、消化、吸収、排泄のサイクルを繰り返すことによって成長

申し上げさせて頂きます。明日、明後日と行わせて頂く予定の、こどもお泊り会ですが、こどもおどばがえりの前哨として位置付けて、四十

二名の申し込みを頂いておりますが、おどばがえり本隊は、現在十一名の申し込みであります。少年会員に一回でも多くおどばに帰って頂き、教祖にご挨拶申し上げますので、網走に繋がりますよう信者の皆様、再度、お子様や、お孫さんに至るまで、お声がけよろしく

お願い申し上げます。

立教187年人のご守護 心定め			
初席者	ようぼく	修養科修了者	教人
60名	29名	18名	11名
成 果 (7月末現在)			
8名	5名	7名	0名



▼参加者 少年会員50名 育成会員17名

7月13日(土)・14日(日)、大教会でお泊り会が開催された。開会式終了後、呼人トレーニングフィールドに移動し、おもしろ自転車や遊具、パークゴルフなどで楽しんだ。2日目は、室内オリムピックで盛り上がり、昼食には、流しそうめんをさせて頂き、そうめんの他にミニトマトやブドウ、さくらんぼ、お菓子なども流し、家庭ではできない経験に子どもたちも大いに楽しんでくれた。

少年会 お泊り会



▼参加者7名・スタッフ1名

7月21日(日)、おぢばで新入生歓迎会を行った。今年も2名がおぢばの高校に入学させて頂き、一緒に学生会を盛り上げていこう!という事で、歓迎会を開催させて頂いた。神殿で集合し、おつとめをつとめ、その後、境内地の除草ひのきしんをさせて頂き、昼からは、奈良市にあるスポーツチャで楽しませて頂いた。

網走学生会

7月21日(日)、おぢばで新入生歓迎会を行った。今年も2名がおぢばの高校に入学させて頂き、一緒に学生会を盛り上げていこう!という事で、歓迎会を開催させて頂いた。神殿で集合し、おつとめをつとめ、その後、境内地の除草ひのきしんをさせて頂き、昼からは、奈良市にあるスポーツチャで楽しませて頂いた。

誠綱 加藤 悦里

陰願いをして頂いた方が、十一月に出直されたので、お礼に参拝を兼ねて参加させて頂きました。

ほこり、いんねんの練り合いは、まだまだ、自分を掘り下げることが必要だと思わされました。講師の先生のお話には、都

誠綱 加藤 敏明

新鮮な気持ちを感じ、講義の内容は講師により、受ける側としては、新しい気付きがあり、講師が婦人会の方々でも宜しいかとも思いますが、「おふでさき」の一部でも聞かせて頂きたいです。「おてふり」のひと下りでも説明を頂いても良いかと思えます。

誠綱 長岡佳奈子

初めての修養会へ行ってから十九年が経ちますが、講義の中で今まで理解できなかったことが理解できたり、知りたかったことが知れてとても嬉しかったです。

また、いつか、修養科に行けたらなと思いました。普段の生活にも活かしていきたいよう、おつとめ・ひのきしん・おさづけを積極的にさせて頂き、真剣に信仰していきたいと思えます。

修養科事前研修会 網走よろこびセミナーを受講して

誠綱 小笠原敏子

教祖のお話を伺っていると、全部、出し切る、貧に落ち切ることがまだできていないなあと感じました。これからは、心定めが、大胆になるような気がします。



度、新鮮で気付きを頂いています。探求心が深まり、三幣先生にお勧め頂いた「大いなる慈母」「みかぐらうたを讃う」の二冊との出会いも読破したいと思えます。婦人会の奥様方の信仰に対するお考えも聞かせて頂くのもよいかと思いました。

31日は、長島スパイラントに行かせて頂き、それぞれ乗りたいアトラクションに乗り、家族や友達にお土産を買ったりと、充実した1日を過ごした。帰りは、名古屋から太平洋フェリーに乗り、船内では、カラオケやゲームセンターなどで楽しみ、2日の夕方に大教会に到着させて頂いた。少年ひのきしん隊に参加した2名の中学生も、元気に各所でお茶を配ったり、ひのきしんに励んでくれた。期間中、大きな事故や怪我もなく、本当にありがたいおぢばがえりとなった。本隊・関東隊・常呂隊・誠陽隊・網走隊 参加者総数 ▼少年会員44名・育成会員36名 計80名



今年も多くの子供たちがおぢばがえりさせて頂いた。本隊は7月27日、大教会を出発。小樽からフェリーに乗り、28日の夜中に詰所に到着。29・30日は、おぢばでの行事に参加。しこみ・ふせこみ行事として、本部で朝のおつとめ、廻廊ひのきしん、おやさとかた講話・おつとめまなび教室で学ばせて頂き、おたのしみ行事では、バラエティー187、アスレチックBOX、決戦!忍者村、チャレンジパークなどで遊ばせて頂いた。昼食には子どもたちも大好きなおぢばのカレーをお腹いっぱいになるまで堪能した。



誠網 仲澤 仲亮

今回で二回目の受講でしたが、改めて感謝致しました。天理教は心の遣い方を教えてくれる存在。

「旬に種を蒔く」「三年千日」などのキーワードがとても心に残りました。

「人に喜んで頂く心遣い」を常に意識し、旬の今に良い種を正しく選び、たくさんの良い種を蒔きたいと強く思いました。

誠網 宮下和子

大教会に来てこのセミナーを学ぶことで自分の心の汚れが少しずつ取れるような感覚を感じました。

まずは、自分が変わることで、そして自分の喜びを話し、人様のお役に立てるよう、相手の方が少しでも身上、事情に耳を傾けて下さってたくさんの人と、また、喜びセミナーに参加できたらと思っています。

人たすけて我身たすかる。大切な人たちとみんなでも少しでもより幸せに近づいて行きたいと思いました。

動 静

7月人のご守護

○中席者 (2名)

直轄 浅田 幸人

網昇 渡邊 勝也

○修養科修了者 (3名)

誠網 中島 義博

小笠原 敏子

加藤 悦里

育英会寄付者

永井貴人様(長男誕生)
森家様(一年祭)

大教会7月の動き

1日 みそか会。役員会議

2日 直轄世話人会

4日 会長、教区祭巡回(天塩支部)

6日 お話し会

7日 役員会会議。縦の伝道日

9日 網走支部例会会場

10日 役員会会議

11日 教祖140年祭網走おたすけ委員会会議。育成部部会。婦人会例会

12日 月次祭。役員会会議。連絡会

13日 教会長夫妻練り合い。修養科事前研修会網走よろこびセミナー

(15日まで)。少年会おとまり会(14日まで)

18日 会長、札幌方面直轄信者まわり(20日まで)

21日 縦の伝道日

23日 会長おぢばがえり。詰所23会

24日 会長、本部神殿奉仕つとめる

25日 五季御礼

26日 本部月次祭遙拝。会長、教区主事会出席。結城和広役員、本部神殿奉仕つとめる

27日 会長、おやさとかた講話講師(28日まで)。藤山重善役員、本部神殿奉仕つとめる。こどもおぢばがえり団体出発(8月2日戻り)。若井農園さくらんぼ狩り

28日 縦の伝道日

29日 大教会一斉活動日

31日 会長、関東方面直轄信者宅丹精(2日まで)



教祖140年祭

教会名	初席	中席	ようぼく	修卒	教人	婦参者		教会名	初席	中席	ようぼく	修卒	教人	婦参者									
						当月	累計							当月	累計								
直轄		4		1		14	66	誠中央						2	23								
美幌							3	常道							1								
女満別			2	2		9	43	徳道		1				3	20								
斜里							0	満金							0								
釧厚						1	4	網安							1								
武士						1	3	オホーツク	2						59								
常呂		1				16	37	網徳			1				3								
旭網						4	11	栗沢						1	7								
御料						1	1	徳元	1	2					8								
東藻						1	1	網盛							3								
陽光						3	10	網新			1				5								
呼人						2	8	網葉							1								
誠陽		1				1	10	網陽						1	3								
網栄						2	2	網誠	4	5	1	3		11	73								
實東	1	1				5	31	網次						2	16								
東網				1		1	1	網昇		1				4	14								
宗稚						12	12	網勇						1	8								
						詰所								21	36								
初席		中席		ようぼく		修卒		教人		婦参者		初席		中席		ようぼく		修卒		教人		婦参者	
成果		成果		成果		成果		成果		成果		成果		成果		成果		成果		成果		成果	
8		2		16		5		3		7		102		524									

(参拝者数 約90人)					
神職講話	賛者	指図方	扨者	祭主	祭員
栗林 徳正	遠田三清 藤田澤水 浩春知康 二繁雄幸	新川 正人	桐谷 善広	大教会長	祭員
胡三 味琴 弓線	小す太拍 り子ん が笛 鼓ね鼓木 ん	地 方	てをどり		祭典
三藤丸 幣山の 輝り子 恵子	大斎栗澤 山藤林田 のり子 雅芳徳忠 人徳正和	細瀬川木 善定善 信和自信	小青藤 松山重 篤正博 志善	大新丸大 教山山山 会会会 長正正 一入徳長	座りづとめ
澤大藤 田山山 裕泰真 子理	菅永岩在 原井原針 明康道敏 宏幸繁彌 文喜	田遠桐 中藤谷 明善善 繁広広	結青新眞 城山山山 美和聖知 子子子教 子教善志	三幣大幣 正正敦 重正敦 教教志	前半
三幣林 美代直 子美子	新安遺三 川田藤澤 正光浩春 美広二雄 志	桐小 藤藤 谷善篤 松志	栗増奥 林田野 徳裕直 正一治	眞菅瀬清 壁原川水 香真祐定 真知知知 子子子幸 子幸志	後半

網走月報 別刊

令和六年八月号

教会長夫妻ねりあい感話

テーマ 「おやさま」



鉦厚分教会長 在原道彌

月日とは親神様のことであり、やしろとは親神様のおられるところであり、教祖のお姿は世の常の人々と異なるところはないが、その心は親神様の心であり、教祖のお言葉は親神様のお言葉であります。教祖は口で教えを説かれただけでなく、筆にも記しました。身を持って行ないに示して私たちに

陽気ぐらしへの道を分かりやすく通りやすいようにお付け下された。これがひながたの道であります。

人間が通る手本として、お通り下された道であること、何処から見ても成程やというようにしたならば、それで良いとおさづけを拝戴した時に頂く、おかさづけでも述べられる成程の人として通ることを教えて下さいました。明治20年1月26日、一れつ人間のたすけを急ぎ込む上から定命を25年縮めて、お姿を隠されたが、ご存命のまま元の屋敷にとどまって、昼夜の別なく尽きせぬ親心を注がれ世界たすけの上にお働き下されています。

これは教祖存命の理、教祖は亡くなったのではなく、現身を隠されたとおえられます。現在ではお姿を拝することはできなくなりましたが、それまで同様、元の屋敷にお住まいになり、変わることなく世界たすけの上にお働き下されています。

教祖年祭への三年千日、ひながたを目標に教えの実践ということ、教祖ひながたとは親神様は世界

一列の人間の真の陽気ぐらしをさせるべく、教祖をしてよろづいさいの教えを説かせせしめられ単一口や筆で説くだけでは真に納得してもらえないと教祖自ら50年の道すがらをひながたの道として通られたのであります。

教祖ひながたと言われるのは、教祖41歳の時に月日のやしろとなられた後から現身を隠されるまでのおよそ50年を指します。世界の子供をたすけたい一心から貧のどん底にまで落ち切り、しかも勇んで通り、身を持って陽気ぐらしのひながたを示されました。諭達にも書かれておりますように「ひながたの道を通らねばひながたいらん」明治22年11月7日のおさしづに「難しい事は言わん。難しい事をせいとも、紋型無き事をせいと云わん。皆一つ／＼のひながたの道がある。ひながたの道を通れんというような事ではどうもならん。あちらへ廻り、日々の処、三十日と言えは、五十日向うの守護をして居る事を知らん。これ分かんような事ではどうもならん。ひながたの道通れんような事ではどうもならん。長い事を通れと言

えば出けんが一つの理。世界道というは、どんな道あるやら分らん。世界の道は千筋、神の道は一条。世界の道は千筋、神の道には先の分らんような事をせいとは言わん。(中略) ひながたの道を通らねばひながた要らん。ひながたをなおせばどうもならん。ひながたをよう聞き分けて、何処から見ても成程やというようにしたならば、それでよいのや」

このおさしづの意味はさあ、ちよつと話して聞かせようあれこれ、いろいろのことを取り混ぜて神の思いを諭しておこう。たすけ一条のため、神は今、日々忙しく非常に急ぎ込んでいるのである。だから日々見るもの聞くもの、何もかもに神のたすけ一条の思いが込められているのであるからお前たちは、見ては道の理を思案し、聞いては道の理を悟り、神の思惑心に治めてくれねばならない。難しいことは言っていない。

お前たちのなすべきことについては全て一つ一つについて、教祖の行為を通して教えておいたひながたの道がある。そのひながたの道を通れないようではどうにもな

らない。存命の教祖は日々あちらこちらと先回りをして守護しているのである。例えば30日向こうのことを願えば50日向こうの守護をしているのである。その事をお前たちは知らずにいる。

この親心が分からない様ではどうにもならない。せつかく親のひながたが示されているのに、そのひながたの道が通れないと言うようでは、どうにもならない。それも長い年月にわたって通れというなら、或いは通れないと言うのも道理かも知れません。世上の道と言うものは、先々どんな道があるかわからない。しかし、神の道は陽気ぐらしへの一筋の道である。世上の道は千筋であって先々行き迷ってしまう道もある。神の道では先々どうなるかわからないことをせよとは教えてない。必ず先々に結構と思う道を見せるのが神の道ひながたの道であります。そのひながたの道を通らないようならば、教祖が示したひながたの道と言うものは必要が無くなってしまふ。ひながたをしまいこんでしまつて通ろうとしないことであつては神の思い無意味になつてしま

う。この事をよく聞き分けて、どこから見ても成程ひながた通り、立派な通り方をしていると言われるようにしたならば、それで間違いないのであると記されております。

教祖50年のひながたの道は、親の苦勞の中通り抜けた人なら涙なしでは語ることはできないと思ひます。それを思えば、我々の苦勞は苦勞のうちに入らないようなものです。世界中のあらゆる宗教の開祖で50年も教えを説いた人はいません。それも教祖は教えだけでなく自ら実践して、人間の生き方のひながたとしての日々を通られました。

今回私は教祖誕生祭、婦人会総会に初めて出席させて頂きました。教祖のひながたを辿ろうということは結局どうする事なのか、何事においても教理と照らし合わせて判断して生きていくのが神一条の生き方でありますが、実際に当たってはそれだけでは悟り切れないことや、通りきれないことが起こつてまいります。そうした問題が起きてくる。その時に教祖のひながたが心の中に求められ、そ

のひながたを慕い、素直に従うことによつて苦しい時でも教祖は勇んで通られた。だから自分も通れるのであると心に悟つて通るならば、この先どうなるか分からないという暗がりの道中であつても、やがて明るい陽気な道に出させてもらふことができます。親神様の教えを知らせて、その思召しに依りて歩んでいく道の手本が教祖のひながたであり、それを手本として通れということであります。

教祖ひながたは万人のひながたでありますから、万人がそれぞれの生き方をしながら、しかも教祖のひながたが手本となるという点でひながたを辿るということは形そのまま、真似するというのでは無いのです。神一条も道を通ろうとするならば、親神様の思召しと人間の情に挟まれて、どうにもならないことやいばらぐろうやがけみちもある。そういう通るに連れんとしうところも、神一条に立ち切つて通るならば陽気ぐらしができるのだということを示されたのであります。

中には教祖は月日のやしろであつて、普通の人間とは違ふのであ

るから、ただの人間である自分にはその通りいかななどと言う人もあるようですが、それは自分も通れそうにもないと思うからそういう言葉が出てくるのであつて、実は月日のやしろであり、親である教祖がお通り下さつたのだから確実な道なのであり、普通の人間もその後を辿れるのであると信じることが大切であります。

教祖は50年のひながたの道すがらを残して下さいましたが、私たちに對して、50年も通れとは言わない。ただの三年千日を通るならば十分受け取つて、あとは神が守護してやろうとまで教えられている親心に感謝して、教祖のひながたを改めて思い起こし通らせて頂きたいと思ひます。

又、今年の年頭挨拶で真柱様が念を押されたように年祭当日は仕切りとしての時間的な目標であり、その日に何かをするのが目標ではない。三年千日そのものが年祭活動の本番であるとお話下さいました。百四十年祭2年目も残り半年心定めに向かつて年祭活動に進んでまいりたいと思ひます。ありがとうございます。